

## ドラッカーの次の世代を生きる

松岡 由希子 (まつおか ゆきこ)  
フリーライター

「将来の夢はなあに？」

私は、たびたびこの質問への答えに窮する現実主義の子供だった。よほど恵まれた才能がない限り、大人になったら、男性はサラリーマンとして生涯ひとつの会社に尽くし、女性は結婚し、子育てと家事にまい進する。特段の才能が見受けられない自分もこういう女性の人生を歩むのだろうと現実的に受け入れつつ、すでに決められているかのような自分の人生を少し退屈に感じていた。

ところが、一九八〇年代終わりから一九九〇年代初頭、世界も日本も劇的な変化を遂げた。ベルリンの壁が崩壊し、ソ連が解体され、東西冷戦が終結した。一方、日本ではバブルがはじけ、未曾有の不況に突入する。当時高校生だった私は、この時代の変化にとてつもないダイナミズムを感じた。世界や日本をそれまで支えていた既存の概念や枠組みが大きく変わる。それは、個人の生き方をも大きく揺るがすに違いない。既に決められたかのような「普通」の生き方だけがすべてではなくなる。凡人の私にも、意志を持って自身の生き方を選択し続ける人生を送ることができるかもしれない。今がチャンスだ。私は直感した。

選択の自由を行使して生きることを望むならば、個として社会に立つ覚悟と力が必要だ。この場合、プロフェッショナルとしての自立が前提であり、そのために相応しい能力・スキ

ル・知識を身につける必要があると私は考えた。二十代の頃の私は、なりふり構わず無我夢中。目の前のものから何か学べないかと常に見つめ、学べるものは何でも学び、何でも吸収した。一人前のプロフェッショナルとしての素地を早く自分のものにしたかったのだ。

右も左もわからない若輩者の私に、社会人としてのお作法や会社員として生きていく術を教えてくれる人は何人もいた。しかし、プロフェッショナルを目指すべくお手本にしたい人、プロフェッショナルへの道標を示してくれる人は、残念ながら私の周りにはいなかった。手当たり次第、書物にも当たった。流行のビジネス書や自己啓発本は「変革の時代」と声高に煽るだけのものや、いかに“巧く”世の中を生きていくかというテクニックのみを説くものがほとんどで、私の望んだことを与えてくれる書物にはほとんど出会えなかった。その頃、ドラッカーの本に出会った。

「変化を怖れてはならない」

「神々がみている」

「自らの責任を中心に据えなければならない」  
ドラッカーは血の通ったシンプルな言葉で、私に語りかける。もやもやと考えてはまともでない私の思いや不安を見透かすかのように、プロフェッショナルとしての心持、これに必要な能力、スキルなど、理路整然と示してくれた。来る時代がどのようなものであるかを描き、その

時代でどう生きるべきか、そのために今何か必要なのかを、論してくれた。私は、ドラッカーの言葉を何度もたどった。そして、自身の意志と力を信じ、プロフェッショナルとして自身を成長させることにまい進することを改めて決意した。

現実をみると、当時の私は、能力、知識、スキル、経験、どれをとっても足りないものばかり。より多くのものを学び、より多くの人に出会い、自分を急速に高めていく必要性を強く感じた。そして、その修行の場として、アメリカの経営大学院（MBA）への進学を決めた。経営のプロフェッショナルが身につけるべき知識・スキルを短期間で体系的に学ぶには、MBAへの進学が最も効率的かつ効果的な選択だと思ったからだ。しかし、修行の場としてあえてアメリカを選んだのは、もうひとつ理由がある。それは、ドラッカーがいたからだ。ドラッカーがどのような国で生活し、何を食べ、どんな空を見て、多くの貴重な言葉を発し続けているのか。その場に行けば、少しでもドラッカーの本当の思いを感じられるような気がしたのだ。

単身渡米した私は、大学院で、寝食を忘れ休む間もなく勉強に没頭した。周りのクラスメイトには、将来、学者になることを希望している人や、起業を計画している人など、未来のビジョンを熱っぽく語る仲間が多く、私も彼らに刺激され、プロフェッショナルに近づくための努力を惜しまなかった。ときどき見上げるカリフォルニアの青空は東京の青空とは比べ物にならないほど、濃く、深く、近かった。

「ドラッカーもこの空を見ているのだろうか。」

ふとドラッカーの言葉を思い出し、自身の志を精一杯かたちにしようと、自分を改めて奮い立

たせることも多くあった。

大学院を卒業し日本に帰国した後も、私は走り続けた。MBAで学んだ知識・スキルを活かし、経営コンサルタント、新規事業プロジェクトメンバー、経営企画スタッフなど、経営のプロフェッショナルとして数社をわたり歩いた。変革の時代に即した新しい戦略や仕組みを多くの企業が模索している時代。様々なプロジェクトに参画し、困難ながらもやりがいのあるミッションを遂行した。その中で、貴重な経験や素晴らしい人々との出会いを通じ、さらに自身を成長させることができた。私も必死だった。中途半端なやり方では成果は出ない。成果を出すことに常に執着し、自分を追い込んだ。

「約束は守る。」

「言ったことに責任を持つ。」

当たり前のことだが時に実社会では安易に反故にされることも少なくないこの二つを私は忠実に貫いた。理屈を超えた物事の本質を見抜き、あるべき正しい姿を思い描き、これを実現するための手立て、戦略を洗いだし、いったん決めたら、目的に向けて行動あるのみ。それがプロフェッショナルの責任であり、誇りであると信じていた。

事実、与えられた役割を誠実に全うすることで、期待以上の成果を出し続けた。どこで仕事をしても、「優秀だ」と評価され、「もっと上を目指して、頑張れ。」と言われることも多くなった。同年代の人よりも早く出世したし、給料もどんどん上がった。いち組織の一員として、この道の延長を歩んでいくことを否定する客観的要素は見当たらなかった。しかし一方で、その人生は予定調和以上ではない気がした。組織の中には自分より優秀な人材はいくらでもいる。組織人としての人生もひとつの選択だが、本当にそれでよいのだろうか。自身のこれから

について思いを巡らすことが多くなった。

「ドラッカー、死んじゃったんだ・・・」  
そんなある日、ドラッカーの死を、日本経済新聞の夕刊記事で知り、思わず私はつぶやいた。ドラッカーはいつでも、過去への深い洞察と研ぎ澄まされた先見の明をもって、「今」をリアルに語っていた。シンプルで優しく強い言葉で、今を生きる私にとって大切なことを、示し続けてくれていた。もうその言葉は聴けなくなってしまう。私は改めてドラッカーの本を一冊づつ読み返した。すると、ある一言が私の心を刺した。

「何によって、憶えられたいか？」

プロフェッショナルとしてそれなりに一人前になった今、これまでの自身の道のりを振り返り、改めて自分のこれからを考えた。私が高校生のときに直感した変化のダイナミズムは、その後の十五年間の現実を見るに、想像以上であった。世界も日本も、既存の概念・システムが急激に機能しなくなり、その変化に対応できず、混乱の只中であつたと私は感じていた。そして、その渦中で、私はプロフェッショナルとしての自立を求め、日々格闘していた。個人的に大変貴重だと改めて思ったのは、この十五年間を主に日本で過ごしたことだ。なぜなら、日本ほど、この時代の変化に対して、社会や企業が戸惑い続けた国はないと思うからだ。

「この十五年間で私が学び、感じ、経験したことを踏まえ、これからの人生、何のために、どう歩むべきなのか。」

それは、私の五感で感じたこと、考えたことを通じ、この変革の時代をありのままに、後世に残すことだと私は考えた。私の主観がフィルターになってしまうことが必ずしも適切とは思わないが、いずれにしろ、この時代はよくも悪くも、後世に生きる人々にとって、個人の生き方にしろ、社会のあり方にしろ、経済の成り立ちにしろ、貴重な礎になると感じるからだ。そのためにも、あと数十年は続くと言われる激動の時代を私は生き抜いていく。その中で自身が経験し、感じ、考えたことを、行動や言葉で発信し続けるべきだと自身の使命を定義した。そして、この使命を全うすることを何よりも優先させるならば、組織人として組織の中で生きるよりも、独立して生きるほうが適当であると判断した。自身の言動に厳格な責任を持ち、完全に独立した個として社会に立つときがきた。会社員生活を終え、独立して今に至る。

「何によって、憶えられたいか？」

今の私の希望を言うならば、「一九九〇年からの数十年間、激動の日本で、迷い悩みながら走りぬき、その時代がなんたるかを示し続けたごく凡人の女性」として憶えられたい。あと数十年は続くと言われる困難な時代、私はこれまでどおり変わらず、この時代にこの日本で自分の可能性を切り拓き、未来へと生き続け、その過程で知ったこと、感じたこと、考えたことを形にして残し続ける。それが、多くのことを教えてくれたドラッカーへのささやかな私なりの恩返しでもある。

#### 【筆者プロフィール】

松岡 由希子 1996年早稲田大学法学部卒。大手メーカーで勤務後、2000年渡米。San Diego State University・MBA課程へ進学。2001年末、繰上卒業後帰国。経営コンサルタント、新規事業プロジェクトメンバー、経営企画スタッフなど、数社にて勤務。2007年、独立。現在、ベンチャー企業の顧問を務める傍ら、フリーライターとして活動。